

金堂の襖絵を描いて—実践報告

平成19年3月25日

創元会理事 小川 尊一

国立新美術館での新生第1回展ともいえる第66回創元展を間近に控え、岡山支部においても、秒読み段階を緊張の面持ちで迎える今日この頃である。

さて、今大学と地域社会の双方がお互いの役割と独自性を発揮し、豊かな生活環境作りという地域の活性化に向かって一つになろうとしている。私が所属する大学の美術講座においても、受講生が少子化の環境で少なくなったことにより、講座維持の対策としてNPO法人を取り込み「もの作り講座」を立ち上げた。こうした学生と外部が一緒になって授業を行ったり、放課後OBが講師となり一般学生の中から有志を募り自主講座を開いたり、また学部としての公開講座、出前授業等、外部を取り込んでの授業づくりが盛んで、「開かれた学校教育」へと変わりつつある。もともと美術という領域は日常の生活の中に豊かさを求め、模索発展してきた。しかしいつの間にか美術は専門化し、一般とかけ離れた高みに価値を置き過ぎ、その部分しか評価されないものになってきた。

自分を振り返ってみても、大学の中と外を線引きしてしまい、大学では美術を教え、外では展覧会に作品を発表するだけという図式を繰り返してきた。このことは創元会においても少なからず言えることではあるが、本当は個々の動きの中にはもっと違った美術への関心や働きかけがあるはずで、それが会の表へ出てきていないだけなのかもしれない。唯一創元会会報でその部分を垣間見ることができるが、美術団体としての活動領域に限度はあるものの、常に領域の拡大と検証がなされなければ発展は望めない。

展覧会を軸に生涯教育という観点をさらに深め、自者のみならず他者ともその域へ共に向かって楽しみを共有しながら活動発展の方向を真剣に探らなければならないだろう。

学校教育の中で授業として取り上げた襖絵制作は、そうした願いのものとして共同制作の立場で行うことにした。その実践を以下に示すことで今後の創元会の方向を探る一助になれば幸いである。尚、当時新聞に連載した記事の抜き刷りをそのまま挙げているが、制作の本当の苦労の部分は文章になっていない。最も難関であったのは白亜地作りの段階であったが、膠と水の分量に問題があり地塗りに1ヶ月を有してしまった。また箔押しを、水張りにするか漆張りにするかなどのたくさんの課題が存在していたことを理解していただきたい。この襖絵は2002年7月頃から始まり、2005年2月1日の完成であった。

絵画課題研究 対象:小川研・ゼミ生(中国からの留学生 3人)、OB生(創元会支部会員 2人)、その他一般有志 数人



「白蓮華」



「紅蓮華」

山陽新聞掲載 抜き刷り

「一日一題」 障壁画

笠岡市有田、小田原山教積院の襖絵が本年2月に納品の運びとなった。画題は住職の希望により真言密教にちなんだもので、本尊を挟んで紅白の蓮華12枚が取り囲み、裏面の6枚ずつが高野山とヒマラヤで側室を飾るという構想だ。

寺は以前、火災で本堂を全焼し、コンクリートで再建されており、本尊は新しく金色に輝いている。

洋画家である私にとって仏閣という公の場に設置する注文制作は初めて。すべてが実験的な試みであった。このプロジェクトはいわばパブリックアートに属するもので、襖絵というその特殊性から、住職、建具師、額縁職人、仏壇職人、大工等異業種の人たちと交わることとなり、専門の立場からの意見を参考に少しずつ出来上がっていく妙味も味わった。描画は卵メディウムに顔料を使用した黄金テンペラで、中国人留学生3人と卒業生2人を助手に活気溢れる制作となった。留学生は日本文化と西洋文化の融合に興味を示し、なによりもアルバイトが彼等の生活の助けになった。ブルース・コール著「ルネサンス芸術家工房」の中で語られているように、その時代「芸術家」という用語はほとんどなく、「画家」は「画家」と呼ばれ、他の職人達と一線を画するようないつももらしい特権等、全く持っていなかった。実際15世紀半ば頃の写本装飾画にも同じ三階建ての建物の中に鎧職人、時計職人、オルガン職人、画家、彫刻家の工房の様子が表されている。このような表現事体が芸術家と他の職人を特に区別しないルネサンスの見方を示している。そして注文制作がほとんどだったのだろう。

「一日一題」 障壁画Ⅱ—蓮華—

真言密教総本山である高野山が吉野、熊野と共に世界遺産に登録されたことは、訪れたことがあるものにとっては当然のことと思える。これで日本の聖地は世界の聖地になった。

初めて訪れた3年前の3月末、シーズンオフの高野山は静寂そのものだった。特に朝靄に包まれた高野連山、吸い込まれるように落ちる夕日、辺りはえもいわれぬ空気に包まれ神秘的。まさに聖地のたたずまいであった。こういった場所に足を踏み入れると、人間自ずと謙虚になり、自分という存在が周りと同化していくのがわかる。制作を依頼された笠岡・教積院の襖絵に何故蓮華と高野山とヒマラヤか。真言密教に関係する題材であることはわかるが、その真意は…。資料によると、八枚の壁を持つ蓮華が心臓に似ていることから仏教ではそれを仏の心、衆生の心とみなしたようだ。また高野山の伽藍を囲んで山の峰が8つあることから、この霊場が八葉の蓮華に包まれ、さらに主尊である大日如来そのものにみたられた根本大塔を取り巻く諸堂が四仏と四菩薩にあてられていて、全体が密教曼陀羅の基本を示し、さらに「五代」の壮大な宇宙感が背後に控えると書かれている。五代とは宇宙を構成する五代要素、地、水、火、風、空のことであり、我々がよく目にする五輪の塔が意味するところでもある。

今、中国国宝展が大阪市の国立国際美術館で開催されている。その中に空海が遣唐使として留学修行した寺、青龍寺(唐の滅亡と共に廃寺)の「阿弥陀三尊座像龕」(8世紀前半)が展示されている。肉圧の石灰岩を浮き彫りにしたその仏は唐の美術全盛を物語り、側面と裏面には経文がびっしり刻まれている。かつて空海もこの仏の前で手を合わせたことだろう。弘法大師によって伽藍建設が始められたのは819年のことである。



「奥の院 杉林」



「根本大塔遠望」

「一日一題」 全てが御仏の懐の中

平成14年3月高野山の取材に向いた。名物の紫陽花、石楠花、新緑にも程遠かったが、途中うまいものを食ったり、風情のあるお寺に立ち寄りたりしながらのんびり行くことができた。宿の予約は出発前に高野山の案内所に電話を入れると、妻と車で着く頃には泊まる宿を探してくれていた。

百室以上ある宿坊は我々しか泊まり客はなくひっそりと静まりかえっていた。部屋に案内され、一息つくころにはどこからあらわれたのか、元気のいい年若い僧が二人、広い廊下をどたどた競争するかのようにやってきて、風呂と食事の時間を告げ、早朝のお勤めは出て出なくてもいいなどと、なにかと気を使ってくれた。

翌早朝、戸の軋む音で目が覚める。なんと年若い僧の一人が声もかけず襖を開け、部屋に立っているではないか。寝床の中の我々の視線とあい、立ちすくんでいる。何も言わず言葉を待っていると、年若い僧は極まり悪そうに朝食の時間を告げ、去っていった。二人は大笑い。全てが御仏の懐の中、鍵も用心も不必要な所以であろう。

高野山の伽藍が遠望できる場所はないか。土地の人に訪ねると、女人道を行けば見られると。早速その場所に向かった。山門の横道から少し行くと道は急に狭くなり、しまいには獣道と化した。周りは杉や高野槇でうっそうとしている。それに混じって黒モジが群生していた。自然の中で見るのは初めてである。二山ほど歩くと急に根本大塔が目に入る。取材を終え、さらに進むと周りは急に明るくなり、杉木立の南の山々が眼下に広がっていた。二度と来ることはないだろうと入念に撮影やスケッチをしたが、数カ月後に再びこの場所にいた。カメラにフィルムが入っていなかったのだ。一度来たぐらいではだめだということか。



「ヒマラヤ黎明」

「一日一題」 峨々たる霊峰

笠岡・教積院から発注された襖絵制作。

3つめの画題である「ヒマラヤ」は密教の国チベットかブータンにちなんでいるのであろう。密教寺院が立ち並ぶブータンはヒマラヤ山麓、海拔2500メートルの盆地にあり、高野山伽藍の基になったかのようだ。

ヒマラヤはさすがに取材に行くのは遠すぎる。せいぜい書店に足しげく通うぐらいだ。寺の住持さんが友好使節団として訪問した時、土産に買って帰った写真を参考にすることにした。以前、私もその周辺を旅行しているので、ヒマラヤの臨場感は少しわかる。

仏教美術発祥の地のインド、パキスタン、アフガニスタンでの主だった博物館は膨大な数の仏像を有し、圧倒された。中でもアフガン博物館、パーミヤンにおける石仏は、もう見るだけで、無常に苛まれる。アフガニスタンの中心部に峨々たるヒンドークシュ山脈があって、ヒマラヤ、カラコルム大山系の最西端にあたる。私が旅行したのはベトナム戦争が集結した1975年で、世界が最も平和に満ちていたころである。イスラム教に対する一途さと、負けるとわかっていても全滅するまで戦う誇り高き民族性をその時知った。

職人の町カンダハルでは玉作り、古タイヤを材料にした雑貨作りを見て回ったりした。夕方ホテル(ホテルといえるかどうか)を抜け出し、トッカ、トッカ金属を打つ音に誘われて行くと、銅器作りの職人街に出た。中の一件にし

やがみこむと主人は目を細め黙って仕事を見せてくれた。裸電球が一つ、薄暗い部屋で全て勘だけで模様をポンチでくり抜いていく。そばでやすりがけをしていた12,3歳の子供が、英語でチャイを買ってこようと私に金を求めた時、老人は子供を叱りつけた。彼らは貧しくても孤高だった。

「一日一題」 常若

昨年、33年に一度の大遷座祭を記念した金刀比羅名宝展が開かれ、早速訪れた。お目当てはなんといっても伊藤若冲の「花丸図」である。私が描いていた襖絵も大詰めを迎え、失敗の連続だっただけに気分転換が図れた。病み上がりの妻を同行していたのでタクシーで大門まで上がると、楽に書院にたどり着いた。

若冲の障壁画は奥書院上段の間にあり、表書院との渡り廊下にも襖絵がよく見えるように飾られてあった。幾重にも重なった金砂子の上に、百花繚乱というが百花どころではない種類の異なる草花が整然と描かれてあり圧巻である。記念に出版された「金刀比羅宮の名宝—絵画」の中に岡山大学大学院生による詳しい解説を見つけてうれしかった。それによると、奥書院の障壁の破損がひどかったため、1764年に若冲に依頼して、上段の間、二の間、三の間、広間にそれぞれ「花丸図」、「山水図」、「杜若図」、「垂柳図」を描かせたとある。その後、若冲の障壁画も破損がきたため、「花丸図」のみ残して、後進の岸岱に同じ画題で描かせたものが現在のものである。

さらにその本によると、主題の前例踏襲は金刀比羅宮の障壁画制作における一つの慣習であったとある。表書院の障壁画も同じような経路で今に至っている。先行画題を踏襲しつつ、独自に一貫した構想をコンセプト的に築いた金刀比羅宮の考えは、その本のテーマでもある「常若」の源となっており、大変興味深い。確たる美意識に裏付けられた約束事の基に代々受け継がれ、先人への敬意を払いつつ、次世代との同時代性を図りながら「常若」つまり新鮮さをいつまでも工夫構築していく姿勢は仏閣という公共の場を形づくる上で中庸を得た方法といえよう。

「一日一題」 金閣・鹿苑寺

以前、NHKテレビのプロジェクトXで「金閣の修復」を観た人は多かろう。私もその一人で撮ったビデオを五〜六回観ている。画面に映されていない苦勞を考えると何度観ても同じように感動する。

その頃、ちょうど依頼されていた笠岡・教積院襖絵制作が箔押しの行程にきていたこともあり、よけいに興味津々だったのかもしれない。襖絵も終わってみれば各工程に渡って失敗の連続であり、ものの成りようは極めて正直に原因と結果を織り成すことを思い知らされるばかりであった。ただ、妙に充実感だけが残り、現時点での限界というか、できればもう一度やってみたいという気持ちが強い。

修復後の金閣を訪れたのは最近のことであり、金閣の金色が自分が思っているのと、どう違って見えるかを知るのがひそかな楽しみであった。薄日さす小春日、念願の金閣を訪れた。鏡湖地に踏み入れた瞬間、私の予想をはるかに超えていた。眼前の別世界、北山文化の極地に思わず「オー」と小声で叫んだ。明るい金色のこれほどまで現代的な響きと気品を備えているものを、今まで見たことがあるだろうか。自然との調和の中での存在でありスケールが大きい。

かつて、そうした風合いの美しさをイコン画に見たことはあった。システィーナ礼拝堂「天地創造」も修復後訪れたことはないが、きっと同じような感動に襲われることだろう。この時の修復には賛否両論あったが、オリジナルに戻すことで本来の美意識を回復することは歴史的にも大変重要なこととなる。

意外だったのは、金閣への拝観者は比較的若者が多く、なべて「すごい」「すごいじゃん」の連発。修復に携わった昭和の職人たちの苦勞は浮かばれ、報われたことだろう。

「一日一題」 パブリック・アート

私の、2002年創元展出品作「予感」を原画にしたステンドグラスが昨年秋、高知県吾川郡の脳神経外科病院にゲストルームに完成し、地域の問題になっているという。笠岡・教積院の襖絵奉納といい、このところ私的にはパブリック・アート流行りである。

今年初め、早速友人数名と高知へ見学。ステンドグラスは中央に螺旋階段のある広い吹き抜けの部屋の上部に位置しており、家具、装飾品とよくマッチしていた。昼は内部からの眺めが、夜になると外からの眺めが一段とその神秘性を増し、いい雰囲気醸し出している。横幅二間(約3.6m)ぐらいのものが二層に分かれ、縦幅は左肩流れに台形に傾斜し、その形も気が利いている。試作としてぜひ制作させて欲しいと懇願されたらしく、通常のステンドグラスとは異なり、クリスタルステンドと呼ばれるFRP(樹脂)で出来たもの。一枚の樹脂板を図案に沿って色を塗りわけ、さらにその上を樹脂板で覆っている。

今、学校と地域社会の双方がそれぞれの役割と独自性を発揮し、豊かな生活環境づくりという地域の活性化に向かっていろいろな活動を展開している。とりわけ自分が関係する美術の領域は元来、そうしたところで模索発展してきたところのものであったはず。いつのまにか自分で学校の中と外を線引きしてしまい、学校では美術を教え、外では発表のため展覧会に出品するだけという図式を繰り返してきた。

この度の襖絵制作が学生にどれだけ創造性を刺激し、価値観や責任の共有化、人間形成と学習のあり方の指針となり得たかなどを思うにつけ、今後、生涯教育の観点からもこうしたプロジェクトを絶えず授業に組み込む具対策を開発していく必要性を強く感じる。

終わりに

3年かけて2005年2月に完成した。広い素描教室の一隅に陣取り、分担して制作する様が、面白く映るのか、いろんな人が見に来る。一般学生にも十分刺激になったみたいで、長期に亘るワーク・ショップといえる。表現方法は生麻貼りのパネルに白亜地をほどこし、テンペラ主体の混合技法で描く。膨大な時間を要するので留学生は授業扱いにした。この授業はプロジェクト科目とはいえ、お寺に収める目的からくる緊張感がともなう。後楽園の蓮華を写生し、金箔張りは額縁屋の意見を聞き、建具師の仕事をまのあたりにする。個人的にも高野山、金閣寺、金刀比羅宮名宝展等、関連した目的で見にいったことが、制作意欲が途切れることなく興味深く続けられた要因であり、それら訪れた場所は必ずヒントを与えてくれた。

公共性を特に意識した作品をパブリック・アートとすれば、襖絵はその領域のもの。設置後、そこに集まる人々の精神的側面への影響を意識し、何か働きかけるものが付加されなければ意味がない。特にお寺の金堂という神聖なパブリック・プレイスとなればなおさらのことである。襖絵制作がどれだけ創造性を刺激し、お互いの価値観と責任の共有の大切さ、人間形成と学習のあり方の指針と成り得たかを思うにつけ、今後生涯学習の観点からも一過性のもので終わらせるのではなく、共同と他業種の知恵から学ぶノウハウを絶えず美術授業に取り入れる具体策を開発実践していく必要性を強く感じる。